

安楽寺だより

第10号

紙面内容

- 2面 福島と向き合う
- 3面 永代供養墓第二回説明会開催
- 4面 仏教豆知識(お灯明)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

22組同朋大会開催「不安に立つ」

先月三月二十日、二十二組の同朋大会が開催されました。一昨年・昨年と宗祖親鸞聖人七百五十回お待ち受け法要、御遠忌法要が勤まり、三年ぶりの開催で、二十二組の各寺院、ご門徒の皆様二〇〇名のご参加がありました。

講演は、名古屋教務所教導の竹原了珠さんに「不安に立つ はからの彼方へ」と題するおはなしをしていただきました。(竹原さんは安楽寺で昨年九月の永代経に御法話いただく)



名古屋教区で

は、五年前、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌をお迎えするにあたり、「不安に立つ」とのテーマをきめて、教化施策を実施してきました。



竹原さんは、「このテーマには種々の意見がありました。昨年、東日本大震災という未曾有の出来事が起こり、今日にピッタリのテーマだと思えます。」とのおはなしから始められました。

「私の育った処は、北陸石川県で、真宗の風土が今でも残っています。皆様はお賽銭を出す時は、何か願い事をするのが一般的だと思いますが、北陸では「お身明かし」と言ってみ教えをいただいて自分の心を見つめる眼をいただく意味を表しています。近所の方に「おみあかししてもらったか」と挨拶代わりに言われます。

「私は幼い頃、母と祖母との嫁姑の確執を見て、毎日「不安な思い」をしていました。また、大学生活・IT企業での生活の中では勉強や仕事に周りの期待に応えられないのでは・・・と、「不安の日々」を送りました。

「二月の節分で「鬼は外」と言いますが、私たちは不安なことが起こると「身にそわないで」「どっかに行つてほしい」と考えます。努力しても周りの期待通りにできないことで不安が深まり、迷いの世界に入ってしまう。このような「不安なころ」を避けるのではなく、人間の思いのすべてが摂めとられている教えに出遭つていく事。自分のすべてを受け止め、ほんとうに帰るべき場所を求めて教えを聞き・学んでいくことが『不安に立つ』ことなのです。」と、聞法することの大切さを話されました。

福島原発事故の被災地では、多くの方が故郷を奪われ、仕事をなくし、家族別々の生活が続いています。こうした不安の真ただ中で、生きる道を求めておられる福島の方々の言葉を紹介され、「不安とは私(2面に続く)」

福島と向き合う 吉田昌史

昨年三月十一日東日本大震災発生、翌十二日福島第一原発事故。何も知らされずに避難を強いられる住人、今でも原発周辺二十キロ圏内の地域は立ち入りすらできない状況が続いています。その他にもニュースではあまり報道されていませんが、福島市、二本松市といった原発から五十キロ以上離れた地域でも放射能の影響が私たちの思っている以上にあります。子供たちは外で自由に遊ぶこともできず、引越越しをされる人が多いことから、学校や幼稚園では生徒・児童の数がかなり減っていると聞きました。

なんとかして子供たちを外で思いっきり遊ばせたいという気持ちから「福島と名古屋をむすぶ子ども会」を東別院で発足して、昨年十二月二十三〜二十九日の一週間にわたって二本松市の同朋幼稚園の園児、保護者の方々六十名ぐらいを東別院で受け入れ色々なイベントを行いました。人形劇、運動会をしたり、動物園に連れて行ったりしました。僕が加盟している仏教青年協議会では名古屋港水族館に連れて行きました。みんなとても楽しそうにしています。珍しい魚を見つけるとガラス越しに食い入るよう見ていました。特にイルカのショーとペンギンの散歩では歓声が上がっていました。子供たちの笑顔を見ていると名古屋の私たち



名古屋港水族館にて福島の子どもたちと(左端が筆者)

の周りにいる子供たちと何も変わらない無邪気な子がほとんどで「原発事故」ということを微塵も感じさせないほどでした。

この「原発事故」は一年、二年でどうにかできるものではありません。十年、二十年それ以上かかる可能性もあります。なので今回だけではなく、今後ずっと付き合う、向き合うつもりでやっていけたらいいなと思っています。一週間放射能の影響がない地域で過ごす体に蓄積された放射能が約半減されるみたいです。それでも半減しかないのですから、いち早い収束を願っています。

(1面より)自身へのうながしと受け止めることが大切なんです。」と、真実の声を聴く意義を締め言葉に講演を終わられました。

講演の後、会場を移り、G・ぶんどりーか(坊さんバンド)による演奏を聞きました。メンバーは真宗寺族で、法話と音楽を通して仏教の教え、親鸞聖人の教えを伝える活動を行なっています。手拍子を交えて熱演され、聴聞する大切さを訴えました。五月には被災地の福島へ演奏活動に行かれるとのこと、活躍を願って大きな拍手を送りました。



熱演するG・ぶんどりーかの皆さん

東別院奉仕研修が五月に開催されます

二年ぶりに中区の東別院で奉仕研修が開催されます。奉仕研修とは、法話を聴聞したり、座談会で話し合ったり、掃除をしたりと一日別院で過ごす催しです。今回は、「仏教は現実の生活とどこで結びつくか？」というテーマで、宗教と疎遠になりつつある現代にどのように向き合っていくのか、生活の中に仏教を感じていくのかを一緒に考えていきたいと思います。ご参加お申込みをお待ち申し上げます。

参加費…二千円（昼食代を含みます）
持ち物…念珠、勤行本、筆記具、雑巾
清掃しやすい服装、同朋手帳（お持ちの方）

日程…午前九時三十分受付
午前十時～午後四時解散

期 日…五月二十一日、二十二日、二十四日、二十五日、二十九日、三十日のうち一日

安楽寺は五月二十一日を予定しております。
申込は安楽寺（〇五二・八四一・二六〇六）まで
申込締切…五月一日 ぜひご参加下さい

平成24年 安楽寺法要日程

- 四月十三日（金） 定例法話 午前・午後
津島市 藤井秀規師
- 五月一三日（日） 春季永代経法要
午前十時・午後一時半
西尾市 榑野明仁師
- 六月十三日（水） 定例法話 午前・午後
昭和区 荒山 修師
- 七月十三日（金） 定例法話 午前・午後
昭和区 八神正信師
- 八月 五日（日） 盂蘭盆会法要
午前十時・午後一時
（初盆法要は八月四日）住職
- 九月十三日（木） 秋季永代経法要
午前十時・午後一時半
稲沢市 榑山正樹師
- 十月十三日（土） 定例法話 午前十時
坊守
- 十一月十二日（月） 十三日（火） 報恩講法要
午後一時半・四時 午前十時・午後一時半
昭和区 荒山 修師
- 十二月十三日（木） 定例法話 午前・午後
昭和区 八神正信師

第2回永代供養墓説明会を開きました

三月四日（日）に安楽寺会館において、昨年九月に建立した八事霊園安楽寺永代供養墓の第二回説明会を開きました。午前十時より、おひとり、またお一人と連れだつて何組かの皆様が来館されました。

二階ホールで、供養墓や場所を紹介したビデオを見ながら説明を聞いていただいた後、タクシーで墓地までご案内いたしました。真剣に考えておられる方が多く、いろいろと質問される方もあり、また、その場でお申込みをされる方もありました。

今後説明会を開く予定ですので、ご関心のおありの皆様はぜひご連絡ください。



平成24年度法要日程

仏教豆知識

第十回

とうみょう

お灯明

お仏壇の「お灯明」といいますと、燭台（蠟燭台）、灯籠、輪灯の三つがあります。ですが最近では安全面の上から、電気仕掛けの仏壇が増えてきています。しかし、本来はやはり火を灯したいものです。まず蠟燭（ローソク）ですが、和蠟燭を用いるのが最適だと思います。和蠟燭は専門店（仏壇店など）に行かないと手に入りにくいので、比較的手に入りやすい洋ローソクを用いる家庭が多く見受けられます。

和蠟燭と洋ローソクの違いは、まず材料です。和蠟燭は木の実（はぜ）から採ったものですが、洋ローソクは石油から摂ったパラフィンです。また、芯は和蠟燭は紙をよじったもので、燃え尽きるとそのままの燃えかすですが、洋ローソクは糸で、燃え尽きるとき糸が残り、ローソクが流れ出すと危険な場合があります。

お仏壇にローソクなどを点けるのは、お



参りし、お勤めする間だけでよいと思います。終わればお灯明を消したいものです。よく耳にすることですが、御葬儀後四十九日までの中陰の期間中、「お灯明とお線香を常に灯しておかねば、亡き人が迷われる」「お仏壇が暗いと故人が寂しがると、信じておられる方がおられますが、これは誤りと思います。「亡き人は、お念仏をいただいて往生され、お浄土の住人となられ、決して迷われていない」というのが、真宗の教えです。

なぜ「お灯明」を灯すかといいますが、光は一切の闇を照らし出すように、仏さまの智慧と慈悲の光を讃えるものといわれています。私たちは、煩惱によって真実の光を見ることが出来ないばかりか、自分の眼が閉ざされていることに気付くこともありません。このような迷いの中にいる私たちを救わずにはおれないと、仏さまはその慈悲の光で照らし続けて下さっているのです。



今年の三月は、東日本大震災一年を

迎える被災地の報道が数多くありま

した。仮設住宅に商店街を復活させた

人たちの感動の記録。壊滅した漁業を

一から始めようと、船を手に入れるた

め東奔西走されている漁師さんのお

はなしなど、テレビを食い入るように

観ていました。しかし家族や家を震災

で亡くし、また仕事のあても見つから

ない方も大勢おられます。「頑張っ

ているのに、これ以上頑張りようがな

い」との声があるのも事実です。真摯

に寄り添っていくことこそ必要とさ

れているのではないのでしょうか。